

2022.9.1

Dance Base Yokohama



パフォーミングアーツ・セレクション in Tokyo 開催のご案内
～コロナ禍に創作・上演し、好評を得たダンス作品群の国内7都市ツアーの一貫として、
2022年11月1～2日に東京・吉祥寺シアターで3作品を一挙上演～

Dance Base Yokohama(DaBY)は、コロナ禍にDaBYで創作し、2021年に愛知県芸術劇場で初演、YPAM連携事業として再演を行った作品から抜粋した3作品を、2022年11月1～2日に、吉祥寺シアターにて一挙上演します。

岡田利規が演出し、バレエダンサーの酒井はなが自身の“死因”を語りながら踊る話題作『瀕死の白鳥 その死の真相』は、酒井自身が改訂したオリジナル版の『瀕死の白鳥』と同時上演。また、DaBYアソシエイトコレオグラファーの鈴木竜による2作品は、演出や衣裳の再考を行い、一部ダブルキャストも迎えた発展版として発表します。このうち、4名のダンサーで構成される『When will we ever learn?』では、ジャズやストリートなど多様なコンテストで優勝、入賞などの結果を残してきた新星 Ikuma Murakamiが入り、さらにダンスのジャンルも超えた作品へと生まれ変わります。また、ソロ作品『never thought it would』は、音楽をtatsukiamanoによる新規描き下ろし楽曲に一新し、元バットシェバ舞踊団の柿崎麻莉子の出演も決定。同一作品を鈴木と柿崎の2人のダンサーが踊ることによる表現の違いをお楽しみください。

尚、本公演は、2022年9月の高知公演を皮切りとして全国7都市をめぐる「パフォーミングアーツ・セレクション2022」ツアーの一貫です。東京公演での上演作品に加えて、ダンスの歴史にフォーカスすることでダンスの「継承」と「再構築」の2つの視座からプログラムを構成した公演「ダンスの系譜学」より酒井はなのほか、安藤洋子、中村恩恵作品の合計5作品の中から、各会場で2～3作品をセレクトし、ショーケースとして開催します。

また、上演作品の初演に関するレビューページを公開しています。全文は、[こちら](#)よりご覧ください。

本事業は、プロフェッショナルなダンス環境の整備、ダンスを社会に拓くことを目的として2020年に設立したDaBYが、愛知県芸術劇場との提携の元で企画したものです。2022年にも新作を創作しており、今後さらに多様なアーティストによる作品の国内外での上演をめざしていきます。

名称 パフォーミングアーツ・セレクション in Tokyo
 日程 2022年11月1日(火)19時 / 11月2日(水)14時・18時
 会場 吉祥寺シアター
 詳細 https://dancebase.yokohama/event_post/pas_tokyo
 チケット 2022年9月1日(木)10時発売
 購入はPeatix (<https://dps2022-tokyo.peatix.com/>)にて
 主催 Dance Base Yokohama
 提携 公益財団法人武蔵野文化生涯学習事業団
 企画・共同製作 愛知県芸術劇場、Dance Base Yokohama

令和4年度（第77回）文化庁芸術祭参加公演



TOUR OUTLINE

名称 パフォーミングアーツ・セレクション2022
 日程 2022年9月8日(木)～12月11日(日)
 会場 高知県立美術館ホール、まつもと市民芸術館、いわき芸術文化交流館アリオス、
 りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館、吉祥寺シアター、熊本県立劇場、山口情報芸術センター
 詳細 https://dancebase.yokohama/event_post/performing_arts_selection2022
 企画・共同製作 愛知県芸術劇場、Dance Base Yokohama
 制作協力 Dance Base Yokohama

	公演日程	会場	上演プログラム	主催
高知 公演	9月8日(木) 19時	高知県立美術館ホール	『瀕死の白鳥』 / 『瀕死の白鳥 その死の真相』 『BLACK ROOM』 / 『BLACKBIRD』 よりソロ 『MOVING SHADOW』 / 『Study # 3』 よりデュオ	高知県立美術館（公益財団法人高知県文化財団）、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
長野 公演	10月7日(金) 16時	まつもと市民芸術館 実験劇場	『瀕死の白鳥』 / 『瀕死の白鳥 その死の真相』 『When will we ever learn?』	一般財団法人松本市芸術文化振興財団
福島 公演	10月15日(土) 16時	いわき芸術文化交流館 アリオス 中劇場	『瀕死の白鳥』 / 『瀕死の白鳥 その死の真相』 『BLACK ROOM』 / 『BLACKBIRD』 よりソロ	いわき芸術文化交流館アリオス、 公益社団法人全国公立文化施設協会
新潟 公演	10月30日(日) 15時	りゅーとぴあ 新潟市民 芸術文化会館 劇場	『瀕死の白鳥』 / 『瀕死の白鳥 その死の真相』 『BLACK ROOM』 / 『BLACKBIRD』 よりソロ 『When will we ever learn?』	公益財団法人新潟市芸術文化振興財団、 公益社団法人全国公立文化施設協会
東京 公演	11月1日(火) 19時 11月2日(水) 14時/18時	吉祥寺シアター	『never thought it would』 『When will we ever learn?』 『瀕死の白鳥』 / 『瀕死の白鳥 その死の真相』	Dance Base Yokohama 提携：公益財団法人武蔵野文化生涯学習 事業団
熊本 公演	11月27日(日) 14時	熊本県立劇場 演劇ホール	『瀕死の白鳥』 / 『瀕死の白鳥 その死の真相』 『BLACK ROOM』 / 『BLACKBIRD』 よりソロ 『When will we ever learn?』	公益財団法人熊本県立劇場、 公益社団法人全国公立文化施設協会
山口 公演	12月11日(日) 14時	山口情報芸術センター スタジオA	『瀕死の白鳥』 / 『瀕死の白鳥 その死の真相』 『BLACK ROOM』 / 『BLACKBIRD』 よりソロ 『MOVING SHADOW』 / 『Study # 3』 よりデュオ	公益財団法人山口市文化振興財団、 公益社団法人全国公立文化施設協会

高知公演：

文化庁 統括団体によるアートキャラバン事業(コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業)「JAPAN LIVE YELL project」



福島公演、新潟公演、熊本公演、山口公演：

文化庁 統括団体によるアートキャラバン事業(コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業)「公文協アートキャラバン事業 劇場へ行こう2」

PRODUCTION STAFF

プロデュース/コンセプト：唐津絵理（愛知県芸術劇場/Dance Base Yokohama）

プロダクションマネージャー：世古口善徳（愛知県芸術劇場）

舞台監督：河内崇、湯山千景、小黑亜衣子

照明デザイン：伊藤雅一（RYU）

音響デザイン：牛川紀政

舞台協力：愛知県芸術劇場

制作：宮久保真紀（Dance New Air）、田中希（DaBY）、宮田美也子（DaBY）

PROGRAM

公演写真撮影: 羽鳥直志

世界中のバレエダンサーが踊り続けてきたフォーキン原作による『瀕死の白鳥』。本公演では日本を代表するダンサーの酒井はなが、演劇作家の岡田利規と取り組んだ新解釈バージョンを上演。白鳥の死因に迫ることでバレエの様式を解体し、現代のパフォーミングアーツの新たな局面を切り開く。

『瀕死の白鳥』

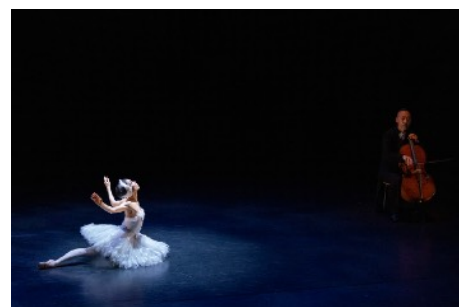
ミハイル・フォーキン原型 酒井はな改訂

出演: 酒井はな

チェロ: 四家卯大

音楽: サン=サーンス「動物の謝肉祭」から「白鳥」

初演: 1907年(マリインスキー劇場 [サンクトペテルブルク、ロシア]) もしくは 1905年(貴族会館ホール)



『瀕死の白鳥 その死の真相』

演出・振付: 岡田利規

出演: 酒井はな

編曲・チェロ: 四家卯大

音楽: サン=サーンス「動物の謝肉祭」から「白鳥」よりアレンジ



日本、イギリス、オランダ、イスラエル等の国内外で活躍してきた同世代のダンスアーティスト4名がクリエイションに参加した新作。「振り付ける」という非対称的な行為を通して、ダンサーの身体を通じて記憶することで「非対称的な関係におけるコミュニケーションモードとしてのダンス」を提示する。

『When will we ever learn?』

演出・振付: 鈴木竜 (Dance Base Yokohama)

出演: 飯田利奈子、柿崎麻莉子、鈴木竜、Ikuma Murakami

ドラマトゥルク: 丹羽青人 (Dance Base Yokohama)

衣裳: 渡辺慎也



コロナ禍でより一層不在感を感じつつある社会的な身体の極として、踊ることに取り憑かれているダンサーの身体を扱った作品。からだの不在はダンサーの不要を意味するのか、今の時代に踊り続けるダンサーの必然性にいかなる価値を見出すことができるのかを問う。

『never thought it would』

演出・振付: 鈴木竜 (Dance Base Yokohama)

ダンス: 柿崎麻莉子 [11/1 19:00・11/2 18:00]、鈴木竜[11/2 14:00]

音楽: tatsukiamano

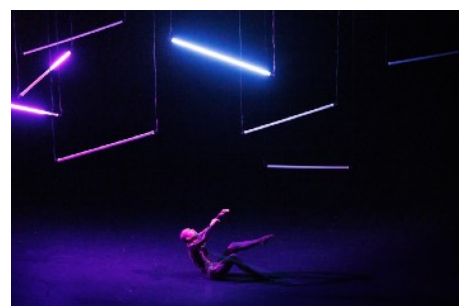
ドラマトゥルク: 丹羽青人 (Dance Base Yokohama)

舞台美術: 宮野健士郎

衣裳: 渡辺慎也

照明コンセプト: 武部瑠人

[初演時]音楽: Alva Noto、音楽編集: 岡直人



『瀕死の白鳥』 『瀕死の白鳥 その死の真相』

演出・振付: 岡田利規

出演: 酒井はな

チェロ: 四家卯大



©Tomohide Ikeya

酒井はな Hana Sakai

DaBYゲストアーティスト

アメリカのシアトルに生まれ、神奈川県鎌倉市で育つ。1979年からバレエを始め、畑佐俊明に師事。橘バレエ学校、牧阿佐美バレエ団に入団し、14歳でキューピット役に抜擢、18歳で主演デビュー。1997年新国立劇場バレエ団設立と同時に移籍、主演を務める。2007年劇団四季の『コンタクト』と09年『アンデルセン』にゲスト出演。2013年ユニットAltneu〈アルトノイ〉として、島地保武との共同創作を本格的に開始する。1996年村松賞新人賞、舞踊評論家協会新人賞、1997年中川鋭之助賞、1998年芸術選奨文部大臣新人賞、2000年服部智恵子賞、2008年舞踊批評家協会賞、2009年芸術選奨文部科学大臣賞、2015年ニムラ舞踊賞、2017年紫綬褒章、2021年第69回舞踊芸術賞など。



©Kikuko Usuyama

岡田利規 Toshiki Okada

DaBYゲストアーティスト

演劇作家／小説家／チェルフィッチュ主宰

1973年横浜生まれ、熊本在住。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。『三月の5日間』で第49回岸田國士戯曲賞を受賞。小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』で第2回大江健三郎賞を受賞。16年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピーレのレパートリー作品演出を4シーズンにわたって務め、20年『The Vacuum Cleaner』が、ドイツの演劇祭Theatertreffenの“注目すべき10作品”に選出。18年より『プラータナー：憑依のポートレート』をバンコク、パリ、東京にて上演。同作で第27回読売演劇大賞 選考委員特別賞を受賞。



四家卯大 Udai Shika

DaBYゲストアーティスト

ロック、ポップス、ジャズ、クラシック、即興音楽と多彩なジャンルで活躍する土俗的チェリスト。

日本の商業音楽界を支えるトップ・ストリングスアレンジャーのひとり。

近年では Bank Band、Mr.Children、ONE OK ROCKをはじめ、多数のロックバンドにストリングス担当として演奏&アレンジで参加。

2019年10月にはバッハの無伴奏チェロ組曲に挑戦した「たいようの谷」をリリース。オリジナル曲やクラシックに即興を取り入れた演奏スタイルも得意とする。<http://udai66.com/>

『never thought it would』

演出・振付: 鈴木竜 (Dance Base Yokohama)

ダンス: 柿崎麻莉子 [11/1 19:00・11/2 18:00]、鈴木竜[11/2 14:00]

音楽: tatsukiamano

ドラマトウルク: 丹羽青人 (Dance Base Yokohama)

舞台美術: 宮野健士郎

衣裳: 渡辺慎也

照明コンセプト: 武部瑠人



鈴木竜 Ryu Suzuki

DaBYアソシエイトコレオグラファー

横浜に生まれ、山梨・和歌山・東京で育ち、英国ランベール・スクールで学ぶ。これまでにアクラム・カーン、シディ・ラルビ・シェルカウイ、フィリップ・デュクフレ、インバル・ピント/アブシャロム・ポラック、エラ・ホチルド、平山素子、近藤良平、小尻健太、夏木マリなど国内外の作家による作品に多数出演。振付家としても横浜ダンスコレクション2017コンペティションIで「若手振付家のためのフランス大使館賞」などを史上初のトリプル受賞するなど大きな注目を集めており、作品は国内外で多数上演されている。



柿崎麻莉子 Mariko Kakizaki

DaBYレジデンスアーティスト

香川県出身、元新体操選手。

Batsheva ensemble Dance Company (2012-2014) に所属後、L-E-V Sharon Eyal|Gai Behar (2015-2021) に所属し、世界各国で公演・WS指導を行う。2011年韓国国際ダンスフェスティバル金賞、2013年度香川県文化芸術新人賞、2014年Israel Jerusalem Dance Week Competition、2020年日本ダンスフォーラム賞、2021年日本ダンスフォーラム賞、など受賞。2021年カルチャーセンター「beq」を熊本にOPENし、文化や芸術をカジュアルに楽しめる場を目指して活動中。「GAMAMA」を主催し、オンラインWSなどを実施。Gaga指導者。



tatsukiamano

金子勲矩監督作品「LOCOMOTOR」、「The Balloon Catcher」など様々なアニメーション作品やダンス作品の音楽を手がける。

2020年アヌシー国際アニメーション映画祭にて「The Balloon Catcher」がノミネートされる。また、ヴェネツィアのCa' Foscari Short Film Festival 2021にてベストサウンドトラック賞を受賞。ダンス作品では日印コンテンポラリー・ダンス共同制作プロジェクト『-scape』などの作曲を担当する。

2021年には、Franz K Endoとのコラボレーションにて「House of Pain : Benzamide」をリリースした。



丹羽青人 Haruto Niwa

DaBYクリエイティブスタッフ。1996年、愛知県生まれ。国立音楽大学卒業。6歳からクラシックギターを学ぶ。11歳からソルフェージュを学ぶ。また幼少から多くのダンス作品の鑑賞や舞台作品、WSへの参加をする。音楽とダンスの関係について関心を持ち、ニブロール、港大尋などの舞台芸術ワークショップに参加。現在、Dance Base Yokohamaに在籍し、ドラマトウルクや制作として作品創作に携わり、身体表象による知的価値の創造を目指している。

PROFILE

**宮野健士郎 Kenshiro Miyano**

建築家。北海道出身。2017年札幌市立大学デザイン学部、2019年東京工業大学大学院を修了。現在はオンデザインでパートナーとして活動している。大学在学中でのストリートダンスや舞台演劇の出演経験から「身体芸術的な美」に興味を持ち、集合住宅、店舗や会場構成の設計を通して人間の身体やふるまいから創造される空間を探る。

Dance Base Yokohama では、都市と身体の関係性を建築的視点で分析し、コンテンポラリーダンスを分野の異なる専門家と共につくりあげている。

**渡辺慎也 Shinya Watanabe**

1986年熊本県出身。

建築学科を卒業後、スタイリストの勝見宜人氏に師事。

独立後、ニューヨークへ留学し衣裳制作の基礎を学ぶ。

現在は、スタイリスト | 衣裳デザイナーとして、ジャンルを問わず活動している。

『When will we ever learn?』

演出・振付: 鈴木竜

出演: 飯田利奈子、柿崎麻莉子、Ikuma Murakami

ドラマトゥルク: 丹羽青人

衣裳: 渡辺慎也

**飯田利奈子 Rinako Iida**

6歳から岡本博雄バレエスクールでバレエを始める。

2010年より神戸女学院音楽学部 舞踊専攻にて島崎徹、Jan Nuyts、Graham Mckelvieに師事。

在学中に、コンテンポラリーダンス、モダンダンスを学ぶ。

2014年より新潟レジデンシャルダンスカンパニー Noism2に所属。

2018年より、オランダのNetherlands Dance Theater1に所属。

2021年に退団。

**Ikuma Murakami**

1997年生まれ、兵庫県出身。

9歳からダンスを始め、様々なジャンルに触れる。

横浜ダンスコレクション2021 コンペティションII 新人振付家部門にてソロ作品『胎内回帰』を上演し、ベストダンサー賞を受賞。

キッズ時代から数々のコンテストや大会などで結果を残し、アジア大会では日本代表を務める。

日本発世界初のプロダンスリーグ 第一生命 D.LEAGUE 21-22 SEASONに「LIFULL ALT-RHYTHM」として参戦。

**唐津 絵理 Eri Karatsu**

愛知県芸術劇場エグゼクティブプロデューサー

DaBYアーティストティックディレクター

お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒業、同大学院人文科学研究科修了。舞台活動を経て、1993年より日本初の舞踊学芸員として愛知芸術文化センターに勤務。2000年に所属の愛知県文化情報センターで第1回アサヒ芸術賞受賞。2021年より現職。2010年～16年あいちトリエンナーレのキュレーター（パフォーミング・アーツ）。大規模な国際共同製作から実験的パフォーマンスまでプロデュース、招聘した作品やプロジェクトは200を超える。文化庁文化審議会文化政策部会委員、全国公立文化施設協会コーディネーター、企業の芸術文化財団審査委員、理事等の各種委員、ダンスコンクールの審査員、第65回舞踊学会大会実行委員長、大学非常勤講師等を歴任。講演会、執筆、アドバイザー等、日本の舞台芸術や劇場の環境整備のための様々な活動を行っている。著書に『身体の知性』等。

Dance Base Yokohama

ダンスを中心とするパフォーミングアーツ作品の創作を目的に、地域や文化芸術を愛する方のために開かれたダンスハウスとして2020年6月横浜を拠点に設立された。ワークショップや実験的なトライアウト公演の企画・運営、海外アーティストやカンパニー招聘、ダンスアーカイブ事業などを行い、振付家やダンサーのみならず、さまざまな分野のクリエイター、批評家、研究者、プロダクションスタッフ、そして観客の交流拠点をめざしている。

アーティストティックディレクターを唐津絵理（愛知県芸術劇場エグゼクティブプロデューサー）が務め、ダンス、パフォーミングアーツ領域全体の活動環境の整備、アーティスト・ダンサー・スタッフの権利擁護、観客・市場拡大施策等を展開する。

2020年「ダンスを社会にひらく」コンセプトが評価され、2020年度グッドデザイン賞受賞。2021年ロゴマークが東京TDC賞2021に入選。